社長メッセージ

日本赤十字社
社長　**近衞　忠輝**

第45回日本赤十字社医学会総会の開催を心よりお慶び申し上げます。本学会は、日本赤十字社の約5万7,000人にのぼる職員すべてが会員であり、医療分野をはじめ、赤十字が直面する様々な人道的課題について議論ができる場となっております。今回の総会では、「地域が求める医療～信頼と安全の赤十字～」というメインテーマが掲げられておりますが、皆様の活発な議論によって赤十字の医療事業がより地域に根差し、住民の信頼に応えるものとなるよう期待しております。

国の医療費抑制政策、医師・看護師の不足ないしは偏在などを背景に、日本の医療を取り巻く情勢は一層厳しさを増しており、国は景気刺激策とあいまって、地域医療再生に向けた総合的な対策として、本年度の補正予算に3,100億円を計上しました。ここでは、各都道府県が地域における医療課題を解決するために「地域医療再生計画」を策定することとされており、全国の赤十字病院でも対応が進められているところです。

今春、新型インフルエンザの感染が世界中に拡大し、日本でも全都道府県で感染者が確認されました。この秋以降、再び流行することが懸念されており、強毒性の新型インフルエンザ発生も視野に入れ、我々も適切な対応がとれるよう準備を万全にしておかなくてはなりません。

春に流行した際には世界への急速な広がりを見せましたが、これをきちんと追跡調査できたことは画期的なことであり、その成果は他の感染症の流行時にも生かされるものと思います。医療の分野についても、今後は国際協力がなくては成り立たないということを如実に示したと言えるでしょう。

医療の国際化に関して言えば、国内では医師や看護師の過重労働が問題となっていますが、これが外国であれば、彼等はとっくにより条件の良い国に行ってしまっていることでしょう。医療分野において日本は“鎖国”に近い状態にあり、このままではいずれ医師も患者も海外に出て行ってしまう。日本赤十字社は近年、国際的な医療協力に力を入れてきましたが、医療をグローバルな視点から考え直さなければならない時期に来ているのではないでしょうか。

さて先ごろ、臓器移植法が12年振りにようやく改正されました。これからはどう臓器の提供者を確保するかが問題となってきます。私の周囲にも、オーストラリアで肝臓を移植した従兄弟や、中国で肝臓を移植した友人がいます。しかし、今後はこうした事は難しくなるものと思われます。移植手術を多く受け入れてきた国の臓器不足や医療倫理の問題などもあり、自国民の臓器移植は基本的には自国内でという流れになってきています。WHO（世界保健機関）ではこうした内容の決議案が出され、それが臓器移植法改正を後押ししたとも言われています。血液事業が国内自給を旨としているのと同じことですが、医療をめぐるトレンドが変わっていく中で、新しい時代の死生観もまた、問われることになるでしょう。

今年は赤十字思想誕生150周年、国際赤十字・赤新月社連盟の設立90周年にあたりますが、この節目の年に、私は連盟の会長に立候補いたしました。11月にはいよいよ会長選挙が行われます。

選挙に向けてこの間、世界各地を巡り、各国の赤十字・赤新月社のリーダーとの対話を続けてきましたが、連盟に加盟しているのは186の社です。この数は偶然にも、日本赤十字社の医療施設数93のちょうど2倍に当たります。私が数十年かけて訪問した赤十字病院が約80に過ぎませんから、未だ行脚の途上にあるとは言え、180を超す国々を歩くのはさすがに大変というより不可能なことであります。よく「世界は狭くなった」と言われますが、実際に旅してみると、不便なところもたくさんあり、やはり世界は広いというのが実感です。

各国の赤十字社は生い立ちも、組織・財政基盤も、活動内容も、能力もまちまちです。私自身、国内の赤十字病院をまとめるだけでも大変な思いをしているわけですから、連盟の会長ともなれば、その困難は想像に余るものがあります。

とは言え、この186ヵ国の社は、赤十字・赤新月という旗の下で共通の理念・原則を分かち合い、互いに助け合う精神で結ばれています。この連帯意識がなければ運動としての赤十字は成り立ちません。この医学会総会も、赤十字という共通の旗のもと、人道という視点から業種や専門分野を越えて話し合いができる絶好の場でありチャンスです。赤十字の一員としての立場から、まず足下で本総会のメインテーマである「地域が求める医療」の姿を探り、赤十字病院が今後地域で果たすべき役割について、皆様の議論が実り多きものとなることを期待いたします。

ごあいさつ

日本赤十字社医学会
理事長　**山田　　史**
（日本赤十字社事業局長）

本医学会も今年で45回目の総会を迎えることができました。これもひとえに、会員の皆様方のご支援ご協力のおかげであり、心から御礼を申し上げます。

今回の総会におけるメインテーマは、「地域が求める医療～信頼と安全の赤十字～」となっております。赤十字病院は地域の中核病院として、地域が求める医療に的確に対応し、質の高い医療を提供することで、信頼と安全の赤十字として地域医療に貢献することとなりますが、そのためにも、日頃から医療情勢に注視し、国や自治体が進める地域医療政策に対し常にアンテナを張っておく必要があります。

深刻な医師不足の問題に加え、公立病院も含めた病院の診療休止や病棟閉鎖など、地域医療を取り巻く課題は山積していますが、国もこの現況を深刻に受け止め、経済危機対策の一環として、救急医療の充実や医師の確保など地域医療の抱える課題解決を目指すこととし、今年度補正予算に3,100億円を計上しました。この対策により、各都道府県は国の補助金を原資として、地域医療再生計画を策定し、地域内の医療機関の機能・連携の強化や勤務医・看護師の勤務環境の改善など、必要な措置を講じることとされています。赤十字病院においても、これらの動きに適切に対応し、安定した経営基盤を確立することで、安全で安心な医療提供体制の構築を進めていかなければなりません。現在の地域医療の危機的状況を改善するためにも、今回の医学会総会における皆さんの議論や研究成果に大きな期待を寄せております。

公的医療機関である赤十字病院は、地域医療に様々な形で貢献する一方で、本年４月に発生した新型インフルエンザへの対応においても、その活動が高く評価されております。政府が水際対策として実施した国内主要空港での検疫業務に対応するため、日本赤十字社の医師と看護師に検疫官としての派遣要請があり、延べ医師19名、看護師19名、計38名が羽田空港と中部国際空港での検疫業務の支援にあたりました。また、成田赤十字病院では、検疫で初めて感染が確認された患者を受け入れ、同院

の感染対策専任チームが迅速な治療にあたるとともに、全国約40の赤十字病院で発熱外来を設置し、患者の診察と治療にあたりました。今回の各病院の迅速な対応は、赤十字病院の特色発揮や存在意義をあらためて地域にアピールする機会にもなったのではないでしょうか。

これらの業務や活動を安全かつ効果的に実施するためには、当然のことながら、十分な技術や学術的知識に加え、他職種とのチームワーク等も重要な要素となるわけですが、日頃から十分な準備や訓練に取り組む赤十字職員であったからこそ、十分な対応ができたものであると確信しております。どうか今後も皆さんの更なる知識や技術の向上のため、また、チームワークを構築する場としても、本医学会を有効にご活用いただければ幸いです。

今回の総会開催にあたりましては、総会会長である前橋赤十字病院の宮崎瑞穂院長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも本学会の更なる発展のためご支援を賜りますよう切にお願い申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

ごあいさつ
「地域が求める医療　～信頼と安全の赤十字～」

第45回日本赤十字社医学会総会
会長　**宮崎　瑞穂**
（前橋赤十字病院　院長）

第45回日本赤十字社医学会総会は、東部ブロックの前橋赤十字病院が担当して平成21年10月15日（木）、16日（金）に群馬県前橋市で開催いたします。

メインテーマは「地域が求める医療　～信頼と安全の赤十字～」です。医療崩壊が叫ばれる現状で、地域に求められる医療、特に信頼される赤十字医療を考えていきたいと思います。

特別講演は群馬県在住の作家で平成20年に映画化された小説「クライマーズ・ハイ」原作者であり、多くの警察小説などでご活躍中の横山秀夫氏に「組織と個人をつなぐもの」のテーマでお話をいただけることになりました。

教育講演は切らないで治せる、これからの放射線治療法として期待されている重粒子線治療について、平成21年度に施設が稼働する群馬大学の中野隆史教授にお願いいたしました。

その他シンポジウムは赤十字に求められる医療のあり方について活発な討議をお願いしたいと思います。

赤十字社医学会は従来の医師中心の学会から全職種が参加できる会となりましたので多くの皆様のご参加をお願いいたします。

群馬県は尾瀬ヶ原や谷川岳などの国立公園を擁する自然豊かな地域であり、草津温泉や伊香保温泉、四万温泉など温泉県としても名高いところです。10月は紅葉の美しい季節でもあります。学会明けには少し足をのばして、ゆっくり紅葉を楽しみながら温泉で癒されてみてはいかがでしょうか。

今年は記念すべき赤十字思想誕生150周年でもありますので、この赤十字社医学会総会での交流を通して、赤十字としての一体感をもった仲間になることを期待し、ぜひ多くの方に参加いただくよう、お待ちしております。